

長野県植物誌パイロット版 IV

藤田淳一 *1・星山耕一 *2・松田貴子 *3・中村千賀 *4・大塚孝一 *5・
川上美保子 *6・石田祐子 *7

1 はじめに

植物誌パイロット版も第4弾となった。用語・用法の統一などの課題はいまだに抱えつつも、着実に前進している気がしている。現地、標本

調査のみならず、正確に特徴が認識されていない可能性なども執筆して、形にしていくことで明らかになるような気がしている。今回は、7名による9科35分類群について紹介する。

2 パイロット版

(1) イワヒバ科 (執筆: 大塚孝一)

◆ エゾノヒメクラマゴケ *Selaginella helvetica* (L.) Spring

北部、中部、南部に分布。常緑性。冬には葉が赤色を帯びることがある。葉は二形で腹葉はほぼ卵形、鈍頭で、背葉は斜上し狭卵形となる。胞子のうがつく枝は直立する。形態がタチクラマゴケと似ているので、県南からタチクラマゴケが記録されたことがあるが、いままでのところこれらの記録は本種の誤同定である。

タチクラマゴケは長野県では従来分布が知られていなかったが、温暖化に伴って暖温帯性のシダが近年多く知られてきているので、今後見つかるかもしれない。

◆ カタヒバ *Selaginella involvens* (Sw.) Spring

南部に分布。常緑性。地下茎が岩上や樹上をはい、直角に地上茎をだし立ち上がりあるいは下垂する。葉は二形で、3から4回羽状に分岐する。胞子をつける部分の葉は栄養葉と異なり小枝に頂生する。

◆ イヌカタヒバ *Selaginella moellendorffii* Hieron.

南部に分布。飯田市南信濃や天龍村などで、園芸品の逸出した個体が路傍などに見られる。冬には葉が黄色から赤色を帯びることがある。在来種は八重山諸島に産する。カタヒバによく似るが、葉身は小葉が密につき、背葉の辺縁が白膜状となる。

◆ クラマゴケ *Selaginella remotifolia* Spring

全県に分布。山地林下の湿潤地に群生してはえる。主茎は長く匍匐し、側枝と担根体をつける。葉は二形性があり4列にならぶ。胞子をつける部分の葉は栄養葉と異なり、小枝に頂生する。胞子のう穂は四角形状で胞子葉は同形。県の中央部の乾燥した地域には少ない。

*1 藤田淳一 長野県松本市 Mail: aegithalos-caudatus@celery.ocn.ne.jp

*2 星山耕一 静岡県静岡市

*3 安曇野市豊科郷土博物館 〒399-8205 長野県安曇野市豊科 4289-8

*4 長野市立博物館分館戸隠地質化石博物館 〒381-4104 長野県長野市戸隠栃原 3400

*5 大塚孝一 長野県長野市

*6 川上美保子 長野県上田市

*7 神奈川県立生命の星・地球博物館 〒250-0031 神奈川県小田原市入生田 499

- ◆ コケスギラン *Selaginella selaginoides* (L.) P.Beauv. ex Schrank et C.F.P.Mart.

北部に分布。常緑性。葉はみな同形で放射状につき多列にならぶ。茎は短くはい、胞子のう穂をつける茎は直立して分岐せず、1 個の胞子のう穂をつける。高山のやや湿った明るい草地や岩上にはえる。長野県絶滅危惧 IA 類で確実な自生地は、北アルプス（白馬村）に知られる。

- ◆ ヒモカズラ *Selaginella shakotanensis* (Frach. ex Takeda) Miyabe et Kudo

北部、中部、南部に分布。常緑性。葉は線状披針形、みな同形でらせん状に茎に圧着してつく。茎は短く匍匐しよく分岐する。前年までの茎や葉は茶褐色をしているが、その先に深緑色の茎や葉をつける。湿った岩上をはい、また下垂する。乾燥にも強く日向の岩上にもはえる。

- ◆ ヤマクラマゴケ *Selaginella shensiensis* Christ (= *S. tamamontana* Seriz.)

中部（佐久）に分布。常緑性。クラマゴケに似るが、主茎と側枝の区別が不明瞭で、胞子をつける部分の葉は他の部分とほぼ同形となる。クラマゴケでは胞子をつける部分の葉は小枝に小さく頂生し、本種とは外見が異なる。石灰岩地域の産地の湿った岩上に稀にはえる。長野県絶滅危惧 IB 類。

- ◆ イワヒバ *Selaginella tamariscina* (P.Beauv.) Spring

全県に分布。常緑性。主茎は直立し、多くの担根体や根が絡み合った太い仮茎となり、葉は開出し株状になる。低山帯の湿った岩壁に着生する。乾燥にも強く乾燥すると内側に強く巻くが、湿ると再び広がる。

(2) ドクダミ科（執筆：星山耕一）

- ◆ ドクダミ *Houttuynia cordata* Thunb.

全県に分布。多年草。地下茎が横にはう。全体に臭気がある。茎はふつう暗紫色で、葉は心形、先端は鋭尖頭、光沢のない暗緑色でしばしば茎とともに紅紫色になる。托葉は鈍頭。花期は 5～7 月。花序は頂生の穂状花序。花は両性で花被はなく、雄しべは 3 個で花糸は基部で子房に合着する。総苞片は白色。湿った日陰地に群生する。

総苞片が八重状になるヤエドクダミ f. *plena* (Makino) Okuyama、緑色になる f. *viridis* J. Ohara が各地で見つかったが、県内では発見されていない。

- ◆ ハンゲショウ *Saururus chinensis* (Lour.) Baill.

北部に分布していたが、現状は不明である。多年草で地下茎は太く横にはう。葉身基部は心形、5 本の脈が目立つ。花期は 6～8 月。花は総状花序で花弁はない。花穂は下から咲き出し、初めは下垂し、後に上を向く。花序に近い葉は、開花期にその下半部が白くなる。低地の水辺や湿地に群生する。

各県で絶滅危惧種に指定されている現状から、絶滅したのかどうか確認が必要である。

(3) モクレン科 (執筆: 星山耕一)

◆ コブシ *Magnolia kobus* DC.

全県に分布。落葉高木。樹皮は灰褐色で平滑。葉は互生し、葉身は広倒卵形か広卵形。葉の裏面は淡緑色で、葉脈に毛がある。葉脈の網目は裏面に突出する。葉縁は全縁で少し波状。花は4月、葉の展開前に咲く。花弁は6枚、白色で基部は紅色を帯びる。花の真下に小さな葉がつく。果実は10月に熟し、袋果は集合果になり、種子は赤い仮種皮に包まれる。丘陵帯から山地帯に自生する。

日本海側に分布し、葉が大きくてやや薄く、花がやや大きいとしてキタコブシ var. *borealis* Sarg. と区別され、1997 長野県植物誌でも記載されていたが、段階的でありここでは分けない。

◆ タムシバ *Magnolia salicifolia* (Siebld et Zucc.) Maxim.

北部、中部、南部（木曽）に分布。落葉小高木、北部の多雪地では低木状となる。樹皮は灰白色で平滑。葉は互生し、葉身は卵状披針形ときに卵形。縁は全縁で葉先は鋭頭。葉をもむと良い香りがする。花は4～5月、葉に先立って開花。花弁は白色。花の真下に葉をつけない。果実は9～10月に熟し、袋果は集合果になる。種子は赤色。丘陵帯から山地帯に生える。

◆ オオヤマレンゲ *Magnolia sieboldii* K.Koch subsp. *japonica* K.Ueda

全県に分布。落葉低木。樹皮は灰白色で平滑。葉は互生し、広倒卵形。葉の表面は緑色で光沢があり、裏面は白緑色で、全面に毛がある。縁は全縁で葉先は短く突出。花は5～7月、枝先に横または下向きに開き、径5～10cm。花被片は白色、芳香がある。果実は9～10月に熟し、袋果は集合果になる。種子は赤色。山地帯上部の湿潤地に生える。

◆ シバコブシ *Magnolia ×kewensis* Hort. ex Pearce

コブシとタムシバの雑種。白馬村和田野。

(4) アワブキ科 (川上美保子)

◆ アワブキ *Meliosma myriantha* Siebold et Zucc.

全県に分布。落葉高木で、葉は長楕円形で10-25 cm、側脈数は25前後と多い。初夏に枝先に大きな円錐花序をつける。白い花は小さく沢山つくため泡が吹いているように見えること、燃やすと泡が出ることからこの名がある。石果は赤い。

◆ ミヤマハハソ *Meliosma tenuis* Maxim.

全県の低山帯に分布。樹高2-3mの落葉小低木で、葉は10 cm程度で羽状複葉。側脈は7-10対で枝分せず鋸歯まで伸びる。淡黄色の花序は小さく曲がり下垂する。冬芽は卵形で褐色の毛が密生する。石果は黒い。やや湿地に生育。葉がコナラの古語ハハソに似ていることが種名の由来。

(5) ベンケイソウ科（執筆：中村千賀）

- ◆ オウシュウマンネングサ *Sedum acre* L. 別名ヨーロッパタイトゴメ

ヨーロッパ・北アフリカ・小アジア原産の帰化植物。茎は基部で分枝して密生し、直立する。葉は互生で茎に密につき斜上し、三角状卵形でしばしば裏面に赤味を帯びる。千曲市・中野市・長野市で確認されている。

外来種も含めて *Sedum* 属全般に生育の現状の把握が必要か。道端・石垣など身近な場所に生育する種の変化が激しいと思われる。外来種の分布情報の書き方も要検討。

- ◆ コモチマンネングサ *Sedum bulbiferum* Makino

全県に生育する。茎の下部は横に這い、上部は立ち上がる。葉は茎の株のものは対生、上部のものは互生し、葉腋にむかごをつける。葉は披針形～倒披針形で扁平。むかごは梅雨期に母体を離れて活着し、翌春成長する。道端や田畑の縁、空き地などに生育する。

- ◆ ウスユキマンネングサ *Sedum hispanicum* L.

ヨーロッパ中部～小アジア原産の帰化植物。全体に白緑色を帯びる。茎は基部で枝分かれして横に広がり、上部で直立する。葉は互生し、線形～線状披針形で、茎と葉の一部が赤味を帯びることが多い。花卉は白色で多くが 6 枚。松本市・中野市で確認されている。

- ◆ メノマンネングサ *Sedum japonicum* Siebold ex Miq. subsp. *japonicum* var. *japonicum*

全県に分布するが稀。花茎は長く地面を這い、普通赤味を帯び、多数分枝する。枝は上方で斜上か直立する。葉は互生し円柱形で細長く、柄はない。深緑色で茎の下方のものは赤味を帯びることが多い。低山の岩上や石垣などに生育する。

- ◆ ミヤママンネングサ *Sedum japonicum* Siebold ex Miq. subsp. *japonicum* var. *senanense* (Makino) Makino

雨飾山・戸隠山・北アルプス・八ヶ岳・南アルプスの岩上に生育。メノマンネングサの高山型で小型。

◆ モリムランネングサ *Sedum japonicum* Siebold ex Miq. f. *morimura*

メノマンネングサの一品種として分類されている。下部は地表を横に這い、マット状に広がり、上部は直立する。葉は互生、又は対生、又は3輪生し、長楕円形～卵形でつやがある。下部の葉は扁平だが上部の葉はやや肉厚。観賞用・グランドカバーとしてよく流通しているため、県外では逸出品が道端などで増えている。神奈川県など南関東で増えているヨコハママンネングサを同一とする見解もある。

インターネット情報であり、根拠は未確認。

◆ オカタイトゴメ *Sedum japonicum* Siebold ex Miq. subsp. *oryzifolium* (Makino) H.Ohba var. *pumilum* (H.Ohba) H.Ohba 別名ヒメコマツ

中部に稀。タイトゴメに似て全体に小型で、葉がやや角ばっている。葉は互生し、上部では非常に密につく。円頭、断面は半円形、縁には微細な粒状突起がある。観賞用・グランドカバーとして栽培されるため、県外では逸出品が道端などで増えている。

県外の状況から栽培品の逸出・定着はすでに起きている可能性が高いと思われる。情報を求める。

◆ オノマンネングサ *Sedum lineare* Thunb.

全県に分布。花茎の基部は匍匐し、上部は斜上する。葉は淡黄緑色で3輪生し、線状～線状披針形で鋭頭、扁平で柄がない。日本のものは結実しない。石垣などに生育するが現在は少ない。

◆ マルバマンネングサ *Sedum makinoi* Maxim.

中部・東部・南部に分布するが稀。花茎は紅紫色を帯び、基部は這って分枝し、上部は斜上する。葉は青みがかった緑色で光沢があり、対生し、倒卵形～さじ型、円頭、短い柄がある。山地の岩上や人家の石垣上に生育する。

◆ メキシコマンネングサ *Sedum mexicanum* Britton

原産地不明の帰化植物。花茎は直立し葉とともに鮮緑色で赤味がない。葉は4-5輪生し、線状楕円形、花茎の葉は互生する。花序は集散状で頂生し、枝を水平に広げ、1枝に花が7～8個が連なって互生につく。市街地の道ばたや空き地に生育。松本市・千曲市で確認されている。

(6) バラ科 (執筆: 藤田 淳一)

- ◆ チョウセンキンミズヒキ *Agrimonia coreana* Nakai

中部、南部に分布。林道沿いや落葉広葉樹林の明るい林床に生育する。花期は、7～8月。他の同属種に比べ、雄ずいが多く、花弁が丸みを帯び、花序下半分の花が離れてつく。托葉は扇形で、葉の羽片が丸みを帯びており、先端3～5枚の小葉が特に大きいという特徴を有する。花序以外の特徴は、オオキンミズヒキ *A. noguchii* Seriz. に似るが、葉の小葉が少なく、全草青みを帯びない点が明確に異なる。

中信地域の一部には、チョウセンキンミズヒキが多数生育する場所も散見される。オオキンミズヒキも正確に認識されていない傾向があるが、本種はさらに認識されておらず、キンミズヒキを含めて標本の精査が必要と考えられる。

- ◆ テリハノイバラ *Rosa luciae* Rochebr. et Franch. ex Crép.

北部、中部、南部に分布する。河川敷や山麓の向陽地等に生育する。花期は5～7月。花は他の同属種に比べて特に大きく、花序は数個ずつの花がつく円錐花序で、典型品は、花柄には毛や腺毛はない。葉の小葉が丸く大きさがそろっており、表面に強い光沢を生じる。托葉は葉柄に延着し、幅が広く、縁が鋸歯縁となり、腺で終わる鋸歯が混ざる。

河川敷に生育するものが典型品に近いと考えられるが、これも他種と交雑していないとは断定できない。典型品は県内において、ごく一部に限られ、山麓や林縁等に生育するものは、花がやや小さい、かつ多く、花柄に腺毛が生えるものが多い。他種との交雑したものと考えられるが、各部の特徴から、交雑状況は複雑である可能性があり、テリハノイバラとせざるをえないものが大半といえる。

- ◆ モリイバラ *Rosa onoei* Makino var. *hakonensis* (Franch. et Sav.) H. Ohba

中部、南部に分布。林縁や、やや混みあった落葉広葉樹林林床に生育する。花期は5～6月。典型品は、花が1花序あたり1つずつ付き、花柄には腺毛があり、茎の刺は直線的となる。変種関係のアズマイバラ var. *oligantha* よりも葉の頂小葉が丸みを帯びており、葉には光沢が出ない。托葉は、葉柄に延着し、幅が広く全縁となり、腺毛が並ぶ。県南部伊那谷には典型的なものがみられるが、県内のそれ以外の地域では、アズマイバラや他種との区別が困難なものが多い。

- ◆ アズマイバラ *Rosa onoei* Makino var. *oligantha* (Franch. et Sav.) H. Ohba

中部、南部に分布（北部は、他種との推定雑種がごくわずか）。林縁に生育する。花期は5～6月。典型品は、花序は数個から10数個ずつ付く円錐箇所、花柄には腺毛がなく、茎の刺は直線的となる。変種関係のモリイバラ var. *hakonensis* よりも葉の頂小葉が尖っており、葉には光沢が出る。托葉は、葉柄に延着し、幅が広く全縁となり、腺毛が並ぶ。他種との雑種、特にノイバラ *R. multiflora* Thunb.、ミヤコイバラ *R. paniculigera* (Koidz.) Makino ex Momiy. との雑種と考えられるものは極めて多く、典型品は全県的に少ない。

- ◆ ミヤコイバラ *Rosa paniculigera* (Koidz.) Makino ex Momiy.

南部に分布（北部、中部は、他種との推定雑種がごくわずか）。痩せ尾根上、まれに湿地周辺に生育する。花期は5～6月。典型品は、花序は数個から10数個ずつ付く円錐筒所で、花柄には腺毛がある。葉の頂小葉と側小葉の大きさがそろっていることが多く、展葉中の葉の表面は白みを帯び、成熟すると白みが消え、表面に光沢が出る。托葉は、葉柄に延着し、幅が狭く全縁となり、腺毛が並ぶ。アズマイバラ *R. onoei* Makino var. *oligantha* (Franch. et Sav.) H.Ohba をはじめとする他種との雑種と考えられるものが多く、典型品は全県的に少ない。

(7) ムクロジ科（執筆：松田貴子）

- ◆ ミツデカエデ *Acer cissifolium* (Siebold et Zucc.) K.Koch

全県に分布。雌雄異株。樹高5～20mになる落葉高木～小高木。葉は3小葉で、小葉は楕円形、縁には大きな鋸歯があり、鋸歯の先は短く芒状に突出する。ふつう枝の先の方が葉身が長い。成葉では表面に散毛、裏面は脈上と脈腋に伏毛がある。果序は下垂し、分果は長さ2.5～3cm、果翼は平行または鋭角に開く。低山帯の湿潤地に自生。日本固有。

(8) ニガキ科（執筆：川上美保子）

- ◆ ニワウルシ *Ailanthus altissima* (Mill.) Swingle

全県に分布。中国原産の外来種。落葉高木で高さ20mにもなる。成長が早く病虫に強いので街路樹に植栽されることがあるが、最近は野生化が多く目立つ。葉は羽状複葉で互生し長さ1mに及ぶ。花は緑白色で小さく、初夏に円錐花序で多数つける。翼果は、最初は緑色を帯び次第に赤色で最後は淡褐色となり、春先まで枝に残って多量に種子散布する。分果は翼状で、中央にある5mmほどの種子は端が捻じれ、上下方向に回転しながら遠くまで飛ぶ。切り株などの萌芽力も強い。

- ◆ ニガキ *Picrasma quassioides* (D.Don) Benn.

全県の低山に分布。高さ6-8mの落葉高木。葉は奇数羽状複葉で葉腋から集散花序を出し、小葉は長さ3-7cm、卵状長楕円形で縁に鋸歯がある。花は黄緑色で4-10cmの集散花序を出し、雄花の花序は雌花の花序より多くの花をつける。果実は、五角形に並んだ分果が出来ることでキハダと区別ができる。苦み成分を含み健胃薬などに有用される。

(9) ツツジ科 (執筆: 石田 祐子)

- ◆ ヒメシャクナゲ *Andromeda polifolia* L 別名: ニッコウシャクナゲ、カラフトヒメシャクナゲ

北部・中部に分布。常緑の矮性低木で高さ **5~25 cm**。地下茎は地中を這い、上部は斜上、地上茎は直立する。葉は革質で互生し、広線形または狭長楕円形、先は尖り、長さ **1.5~3.5 mm**、幅 **3~7 mm**。葉の縁は裏面に反り返り、裏面は白色を帯びる。枝先に紅色を帯びた白色の花を下垂する。花柄は直立し長さ **1~2 cm**。花冠はつぼ型で長さ **5~6 mm**、浅く **5 裂**し裂片は反り返る。雄蕊は 10 本。葯は先端の舞面に 2 本の刺状突起があり、上端に孔があいて花粉を散らす。蒴果は径 **3~4 mm**。花期は **6~7 月**。亜高山帯のミズゴケ湿原に生育する。長野県は本種の南限域にあたる。長野県版レッドリスト (維管束植物) 2014 で、準絶滅危惧 (NT) に選定されている。

小低木とどちらにするか検討。

属の説明を作るなら、そちらに移動させる。

- ◆ コメバツガザクラ *Arctericia nana* (Maxim.) Makino 別名: ハマザクラ

北・中央・南アルプス、八ヶ岳に分布。常緑の小低木で高さ **5~15 cm**。茎は地下を横に走り、枝は細く直立する。葉は **3 輪生**し、楕円形で厚く革質。長さ **5~10 mm**、幅 **3~5 mm**。花冠は白色、つぼ型で先は浅く **5 裂**し、長さ **4~5 mm**。枝先に **3 個**ずつつく。雄蕊は 10 本で、葯は背面株に 2 本の刺状突起があり、上端に孔があいて花粉を散らす。蒴果の径は約 **3.5 mm**。花期は **6 月~7 月**。高山帯の岩場に生育する。

- ◆ ジムカデ *Harrimanella stelleriana* (Pall.) Coville 別名: デムカデ

北・中央アルプスに分布。コケ状の常緑矮性低木。高さ **3~7 cm**。葉は米粒状で長さ **2~3 mm**。鋸歯はない。枝先に短い花柄を出し白色の花を **1 つ**、下向きにつける。花冠は白色、鐘形で深く **5 裂**し、長さ **4~5 mm**。雄蕊は 10 本。葯は球形で背面の中ほどに 2 本の刺状突起があり、頂端に孔が空いて花粉を散らす。蒴果は約 **4 mm** で上向きになる。花期は **7 月から 8 月**。高山帯の雪解けが遅い(雪田)の岩隙に生育する。太平洋を取り巻くように北半球の寒帯や高山に分布し、長野県は本種の南限域にあたる。

高山植物は北方系と関係性や分布が特徴的だが、広域分布の話をごくまで盛り込むか。現在のフォーマットでは、県内の分布域に記述をとどめているが、種そのものの分布域は無しで良いのか? 改めて考えさせられた。

◆ ミネズオウ *Loiseleuria procumbens* (L.) Desv.

北・中央・南アルプス、浅間山、上信高原、八ヶ岳に分布。1属1種である。常緑の矮性低木。倒状分枝し、マット状に広がり、高さは3~6 cm。葉は対生で革質。広い線形から狭長楕円形でごく短い葉柄をもち葉枕の上につく。長さは7~12 mm、幅1.5~3 mm。縁は裏面にまくれ、裏面は中軸を除き密に毛が生える。花は枝先に2~5個まとまって散形状につく。花冠は鐘形で5裂し、裂片は尖り淡紅色。雄蕊は5本、葯は楕円形で縦に裂ける。蒴果は卵形で先から2~4裂する。花期は6月~7月。高山帯の岩場に張り付くように生育している。本州中部地方以北に分布し、周北極(北極周辺地域)に分布する。

属の説明を作るなら、そちらに移動させる。

小低木とどちらにするか検討。

高山植物は北方系と関係性や分布が特徴的だが、広域分布の話をどこまで盛り込むか。現在のフォーマットでは、県内の分布域に記述をとどめているが、種そのものの分布域は無しで良いのか？改めて考えさせられた。

ミネズオウには、花冠が濃紅紫色のものはベニバナミネズオウ *Loiseleuria procumbens* (L.) Desv. f. *rubra* Hayashi (林 1952)、葉の先が黄色いものはツマキミネズオウ *Loiseleuria procumbens* (L.) Desv. f. *watanabeana* Yanagita (柳田 1936) の2品種が記載されているが、それぞれ北海道からの報告である。長野県内に分布しているかは不明。そのようなミネズオウを見た方は、写真等でお知らせいただきたい。
(もちろん、標本が望ましいが、本種の分布地の多くは国立公園等法規制がかかっている地域なので、標本採取に関しては許可申請を行ったうえでやる必要がある。)

3 おわりに

執筆していると不足している情報がみえてくる。何が不足しているのか、その不足をどうすることで補完、解決できるのか、徐々に執筆者の間でも見えてきている気がする。一方で、文書化し、批判やアドバイスを頂くことは重要であると同時に、パイロット版の紙面上で求める情報を提示するのも情報収集の重要な手段と考えている。これまで同様に、内容に対する意見や情報等お寄せ頂ければ幸いである。

4 参考文献

林弥栄 (1952) 日本産樹木新報知 (I). 林業試験場研究報告 No.57:151-157pp
神奈川県植物誌調査会・編 (2018) 神奈川県植物誌 2018 (上). 神奈川県植物誌調査会 :719-729pp
御巫由紀・大作晃一 (2019) 野ばらハンドブック. 文一総合出版, 東京 :.
(三河の植物観察) Flora of Mikawa, <https://mikawanoyasou.org/data/morimuramannengusa.htm> (2023年1月17日閲覧)

長野県 (2014) 長野県版レッドリスト (植物編)
2014. 長野県環境部自然保護課・長野県環境保全研究所自然環境部, 長野 :225p
長野県外来植物目録編纂委員会・編 (2018) 長野県外来植物目録. 長野県外来植物目録編纂委員会 :18p
長野県植物誌資料集作成委員会 (2005) CD-ROM 長野県植物誌資料集 (普及版)
National Museum of Nature and Science (2018) Science Museum Net (S-Net), <http://science-net.kahaku.go.jp/> (2022年12月22日閲覧)
National Museum of Nature and Science (2018) Science Museum Net (S-Net), <http://science-net.kahaku.go.jp/> (2023年1月14日閲覧)
長野県植物目録編纂委員会・編 (2017) 長野県植物目録 (2017年版). 長野県植物目録編纂委員会 :88-89pp
大橋広好・門田裕一・木原浩・邑田仁・米倉浩司・編集 (2015) 改訂新版 日本の野生植物 1. 平凡社, 東京 :54p
大橋広好・門田裕一・木原浩・邑田仁・米倉浩司・編集 (2015) 改訂新版 日本の野生植物 1. 平凡

- 社, 東京 :71-74pp
- 大橋広好・門田裕一・木原浩・邑田仁・米倉浩司・
編 (2016) 改訂新版 日本の野生植物 2. 平凡社,
東京 :215-229pp
- 清水建美・監修 (1997) 長野県植物誌. 信濃毎日新
聞社, 長野 :292-294pp
- 清水建美・監修 (1997) 長野県植物誌. 信濃毎日新
聞社, 長野 :632-637pp
- 清水建美・編 (2003) 日本の帰化植物. 平凡社, 東
京 :98-99pp
- 杉本順一 (1961) 日本樹木検索誌. 六月社, 大阪.:
- 杉本順一 (1965) 日本草本植物総検索誌<双子葉編
>. 六月社, 大阪.:
- 柳田由藏 (1936) 北海道に於ける新植物. 植物研究
雑誌 12 巻 6 号 :421-425pp
- 米倉浩司・梶田忠 (2003-) 「BG Plants 和名-学名
インデックス」 (Ylist, <http://ylist.info>) (2024 年
1 月 13 日閲覧)
- 米倉浩司・梶田忠 (2003-) 「BG Plants 和名-学名
インデックス」 (Ylist, <http://ylist.info>) (2023 年
1 月 14 日閲覧)